

異文化トレーニング教育支援のための e-ラーニングシステムの実践運用

Practice of an E-Learning System for Intercultural Training

諏訪 いずみ^{*1}, 上出 祐美加^{*1}, 板倉 由知^{*1}, 濱田 利行^{*1},
 白井 治彦^{*2}, 黒岩 丈介^{*1}, 小高 知宏^{*1}, 加藤 優子^{*3}
 Izumi SUWA^{*1}, Yumika KAMIDE^{*1}, Yoshitomo ITAKURA^{*1}, Toshiyuki HAMADA^{*1}
 Haruhiko SHIRAI^{*2}, Josuke KUROIWA^{*1}, Tomohiro ODAKA^{*1}, Yuko KATO^{*3}

^{*1} 福井大学大学院工学研究科
^{*1} Graduate School of Engineering, Fukui University

^{*2} 福井大学工学部

^{*2} Faculty of Engineering, Fukui University

^{*3} 仁愛大学人間学部

^{*3} Faculty of Human Studies, Jin-ai University

Email: suwa@i.his.u-fukui.ac.jp

あらまし:我々は、異文化理解の一手法である異文化トレーニングを用いた教育支援する e-ラーニングシステムを開発、大学の異文化理解の講義において実践運用を行っている。本システムは講義の副教材として使用している。本発表では、作成したシステムの概要と昨年・今年の実践状況、異文化への理解を深める導入としての効果と今後の改善点について述べる。

キーワード: e-ラーニング, 異文化理解教育, 講義支援システム

1. はじめに

多文化共生教育や国際理解教育などの異文化理解を目的とした講義では、異文化トレーニング⁽¹⁾という演習が教育手法の一つとして用いられる。しかし、このトレーニングを講義で行うには、教材作成の手間や難しさ、課題のフィードバックや意見交換のための時間不足といった問題があり、有効なトレーニングでありながら、実践しにくいという問題点が挙げられている⁽²⁾。

そこで我々は、異文化トレーニングを e-ラーニングシステムとして実装することで、上記の問題を解決することができると考えた。同時に、ICT の特徴を生かすことで、異文化理解の基本となる価値観や常識の多様性への気づきを促すことができると考え、システムの設計と実装を行ってきた⁽³⁾。

2. 異文化理解の為に e-ラーニングシステム

本システムは高等教育機関における異文化トレーニングの講義を対象として作成した。

実装した異文化トレーニングは、異文化間教育を専門とする共同研究者の 1 人が作成したオリジナルの演習問題である。トレーニング内容は、「常識」、「価値観」、「ステレオタイプ」、「偏見」、「自文化中心主義」、「文化について」の 7 つのセクションからなり、後になるほど広範で高度な概念を扱う。

演習は各セクションの概念理解の導入となる課題群である。各セクションは、問題→解説→他者の回答閲覧→意見交換というステップを踏み、概念理解から思考へと進む。各セクションは独立しているので、講義にあわせて選択的に利用できる。

ICT の特徴を生かした機能は以下である。

【回答閲覧】異文化理解の第一歩である、価値観や

常識の多様性への気づきを促す為に、他人の演習の回答や集計結果をリアルタイムで閲覧する事ができる。

【掲示板(討論課題)】異文化理解をより深める為に、教師により提示された課題などについての意見交換を行う。制限時間を気にせず発言ができ、参加者全員の意見を閲覧する事ができる。

【チャット】演習をやりながら思った事の書き込みができるスペースを演習画面に併設する事で、学生同士の意見交換を促進し、多くの意見に触れる機会を提供する。

また、学生の興味を引くために、アニメーションや漫画による解説を導入している。

学生は、このシステムを利用して学習することで、各セクションについて基本的な知識の学習と予備的な意見交換を行った状態で講義に臨むことができる。教師は学生の学習状況をモニターすることで、講義の構成に反映することが容易になると同時に、より進んだ議論や対面式でなければできないトレーニングに十分な時間を確保できるようになる。

本システムは、Linux 上で、web サーバーに apache2.2, システム部分やインターフェースは PHP, html, CSS, データベースに MySQL, アニメーションを Flash で作成した。

3. タイトルなど

仁愛大学で前期に開講される「異文化理解」の 2012 年度と 2013 年度の講義において、本システムを運用した。この講義は仁愛大学人間学部コミュニケーション学科の 1 年生を対象とし、受講者は 2012 年度は 62 名、2013 年度は 85 名であった。システムは Moodle からのリンクとすることで、利用者情報

の取得と利用者の制限を行った。ここでは、2012年度の運用を中心に述べる。

3.1 実施方法

2012年度は、学生をシステムを使用するグループと使用しないグループに分け、使用グループには、同じ演習ではないがシステム利用分に相当する筆記演習を課した。使用するグループには講義時間外に本システムの使用方法を説明し、以降は講義時間外に自習として学内や学外で使用してもらった。

進捗に関しては、どちらのグループに対しても教師がスケジューリングを行い、予習として進めておく範囲を学生に指示した。

3.2 学生へのアンケート結果

2012年度は32名が本システムを利用した。使用後に行ったアンケートの結果の一部を以下に示す。システムの利用全体についての結果は、図1示す通り、全体として肯定的な評価を示している。

回答閲覧機能についての結果を図2に示す。異文化トレーニングが目的としている、文化の背景にある価値観の多様性への気づきの促進と、その理解を深めるのに役立ったことが読み取れる。

システムをいつ使用していたかについて、複数回答を許して、32名中14名が大学の空き時間や休み時間を利用したと答えている。学生が、隙間時間も利用して演習を行った様子がみとれる。

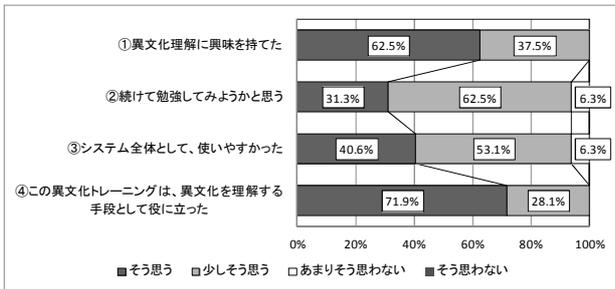


図1 全体としての評価

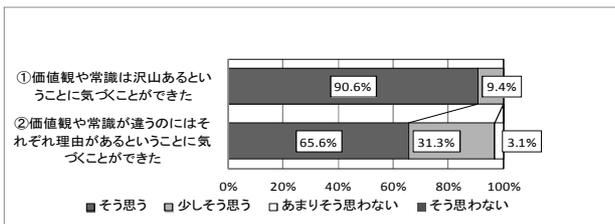


図2 回答閲覧機能の評価

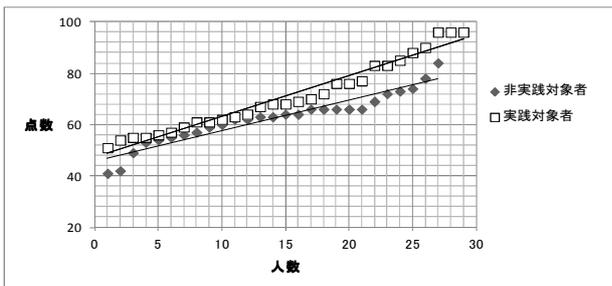


図3 定期試験の結果

3.3 定期試験の結果

2つのグループの定期試験の結果を図3に示す。試験は異文化コミュニケーション学の重要な基礎的用語についての穴埋め式問題とキーワードについて説明を求める記述式問題の2種類で構成されている。

演習課題の平等性という問題があるが、特に概念理解の穴埋め問題について、システムを使用したグループの成績がよかった。アンケートでは演習終了後に再度システムにアクセスしたものが13名ある。これは、アニメーションや漫画による演習解説や他者の回答閲覧や掲示版による意見交換により、概念理解に効果があったと同時に、復習に効果が高かったためと思われる。

4. まとめ

我々は、異文化トレーニング教育支援のためのeラーニングシステムの開発を行い、2012年度より異文化理解を目的とした講義において、学生の講義時間外課題として本システムの運用を行っている。2013年度の運用結果については発表にて報告する。

アンケートや試験の結果から、本システムが異文化理解を目的とした講義の副教材として、学生の理解を促すために有効であったと考えられる。また、他者の回答閲覧や教師主導ではあるが掲示版による意見交換により、異文化理解の基本となる価値観や常識の多様性への気づきを促すことにも効果があったと考えられる。

5. 今後の課題と展望

掲示版とチャットについては、自主的な意見交換としての利用は、まだ十分には行われていない。一般的に、意見を述べるのが苦手な学生が多いため、発言しやすくする工夫が必要である。また、これらの使用意図を周知することも必要である。

システムの使いやすさについては、まだ、改善が必要である。現時点では、学生用の進捗管理画面がなく、個人での進捗管理ができない。これについては、進捗状況を利用したポイント制やゲーム性にあわせて、発言の促進等への利用を考えており、今後機能を付加する予定である。

参考文献

- (1) 八代京子, 町理恵子, 小池浩子, 磯貝友子: “異文化トレーニング - ボーダレス社会を生きる -”, 三修社 (2001)
- (2) 加藤優子: “異文化間能力を育む異文化トレーニングの研究: 高等教育における異文化トレーニング実践の問題と解決に関する一考察”, 仁愛大学紀要人間学部篇, 8, 12-21 (2009)
- (3) 上出 祐美加, 加藤 優子, 諏訪 いずみ, 久保 長徳, 籠谷 隆弘, 白井 直彦, 黒岩 丈介, 小高 知宏, “異文化理解を目的とした教育のための e ラーニング教育支援システムの概要と運用報告, 第37回教育システム情報学会全国大会 E1-3 (2012)